

古い地図を見ると、

確かにそこには「益蟹尾」という村があった。サワガニが多く取れたそうだが、逆に言えば美しい川とサワガニ以外には、ほとんど何も無い村だったという。今は満々と水を湛え、下流域に水利と安全をもたらす「床奈ダム」が、そこにはある。

そのダムの建設にあたっては、地域全体が割れた。ダム建設推進派と反対派とが、中央の政治的、経済的思惑をも含みつつ、激しく対立した。肉親同士が対立することも少なくなかったという。とても收拾がつかないと思われた諍いであったが、推進派の代表の一人、洞田桃の尽力により、ダムは建設にこぎつけることができた。

洞田桃は、これをきっかけに地元の人々からの尊敬を集め、その後県議会議員を経て、衆議院議員、国土交通省副大臣にまでのぼりつめた。一方では、彼女には黒い噂も常につきまとった。そのはじめは、ダム建設に関する巨額の裏金であったという。

テレビに映る彼女は、良くも悪くもエネルギーで歯切れよく、目立つ存在だったので、そういうことも少なからずあったろうと思われる。しかし多くの知る彼女は、むしろ寡黙で陰鬱で、どこか投げやりな、どちらかと言えばとしない中年女性だった。その、時折見せるばつとしないささえ、彼女の支援者にとっては魅力の一つであったというから、世の中わからない。

彼女の一人息子であるぼくは、悲しいかな大した能力もない凡人だが、大学を卒業し、特に苦労もなく大手建設会社に入社し、なぜか人並み以上の昇進をした。ぼくは、総務部総務課総務係長として、上司に言われるまま無機質な日々を送っていた。同僚たちとの日々は、それなりに楽しくはあったが、生きがいなど感じたことはない。それを不満に感じたこともまた、ない。

母である洞田桃に関するさまざまな噂については、特に興味もなく、むしろ耳を塞ぐようにして過ごしてきた。母のことを忘れている時の方が幸せではあったが、母の影響なしに今の自分があるかといわれると、自信はない。

しかし、幸子との結婚を真剣に考えていた当時、彼女が、「うちは清和源氏の流れをくむ、なんとかかんとかで・・・」という話しを持ちだした。それまでそんなことは意識したこともなかったので、結婚とはそういうことまで考えるものなのかと驚いた。どうせ古い話はわからないが、せめて自分の母親のいくつかの疑惑について、一応調べてみようかな、その程度の気持ちだった。

あの日記、見てもいいかな。

母は、3年前に肺がんで亡くなっていった。六十七歳だった。

葬儀を終え、遺品を整理していた時、金庫の一番奥から、二冊の古びた日記のようなものが出てきた。一冊は、母の日記のようであったが、もう一冊はもっと古そうなものに見えた。その時は忙しく、また他人の日記を読むことに対しての嫌悪感、そして母の秘密を知ってしまうかもしれないという恐怖感から、そのままにしておいたのだった。

その日記を読んでみよう。

蔵の一番奥の金庫の鍵を開けた。その金庫の一番奥に、二冊の日記はやはりあった。

埃っぽくカビ臭い蔵が昔から嫌いだっただけは、一刻も早くその場から立ち去るために、二冊とも取り上げて、金庫に鍵をかけ、母屋に戻った。その二冊をリビングのテーブルの上に置いた。蛍光灯の光の下で改めて見ると、比較的新しい方の一冊が母の日記であろうと推測がついた。

母の日記を紐解くのは、やはり恐ろしかった。

毎夜、彼女は自分自身に何を語りかけたのだろう。周囲には決して話すことができなかった、自分自身にしか語りかけることができなかつたことが、この中には、ある。

そして今、ぼくの目の前に、観念したかのように、無抵抗に、静かに横たわっている。恐怖に慄いているようにも見えたが、それはむしろぼくの方だったのかもしれない。

このような事態を、母は想定していただろうか。そんなことを思うと、日記を開く勇気が失せ、何となく、もう一冊の方を適当に手にとって開いてみた。

紙は相当に傷んでいて、字も辛うじて読める程度であった。細かな字はほとんど読めないのに、慎重に頁を繰りながら、読めそうな文字だけを、読むでもなく拾っていった。どうやらこちらも日記らしかったが、頭の中は母の日記のことでいっぱいだった。

数頁ほど繰った。もう単なる指の運動になっていた。

ところが、次の頁を開いた途端、大きな、黒々とした文字が目飛び込んできた。

これは報いだ

桃は生きていた

あの痣

見間違えようがない

どうして

運命

あの子が幸せになるなら
私たちは報いを受ける

この頁を読み終えた瞬間、ぼくはこの日記が何であるのかを悟った。これは、洞田桃うらたももの父親の、つまりぼくの祖父の日記なのだ。

その日記を彼女は読み、そして深く隠した。隠しはしたが、処分はしなかった。それを読む可
能性がある人間は、ぼくだけだった。

次の頁を恐る恐る繰った。

三月二十四日、壇ノ浦だんうらの忌日きじつ

その日に生まれてしまった桃ももは

村にとっては忌まわしい穢けがれ

あの子はこの村では生きられない

忌日に生まれた子は

何百年も続く　それが村の掟おしへ

村を滅ほろぼすから

しかしどうしてわが子を殺あやめることができよう

太腿おもとにあった痣あざ

桃ももと名づけたその子を、死んだということにして

あの晩そっと、川に流した

せめて、生きてさえいてくれれば

何百年間、我々はただひっそりと暮らしてきた

過去の栄華えいがを忘れ、世の中の移り変わりにも背を向け

ただひっそりと

生き残るだけのために

ダムはそんな我々の生活を奪うばう

柴刈しばかりに来た下の村の者との争しげいはしばしばあった

いつも我々は耐えた
ひっそりと暮らしている我々がなぜ
貧しい者が犠牲になる 弱い者が追いつめられる

しかし、あれは桃だ 見間違えるはずはない
桃は生きていた 桃が帰ってきた ありがとう 生きていてくれて

桃だとわかったとき あの痣を見たとき
その目にこもっている憎しみを見たとき

これは運命だ 報いは受けなければ
桃を生かしたのは私だ
村とともに滅びよう

日記はそこで終わっていた。

何なんだこれは。暗号か。おとき話か。いまどき。さまざまな思いが去来した。

桃は、村では生まれてはいけけない子どもだった。それは単に、三月二十四日に生まれたという理由で。桃と名づけられたその子は、川に流され生きることを許された。

昔、母の太腿にハートを逆さまにしたような痣があったのをぼくは記憶している。ぼくはそれを見せてくれとせがんだこともあったが、母は決して見せようとはしなかった。ただ一度だけ、「桃の形の痣があるから桃って名づけられたのよ」と独り言のように語ったことがあった。その時以外は、話題に出すのすらいけないことのような気がしていた。年老いてヘルパーさんに入浴を手伝ってもらうようになってからも、ひたすらにひざの内側だけは隠すようにしていた。

その母が、ダム建設を進めるために、益蟹尾村の村長、自分の父親と話し合いを持った。村長は、説得されたというよりは、反対する意志を失った。村の掟に背いた報いとして、村とともに滅ぶことを自ら選択した。わが子の幸せを願いながら。洞田桃だけが為し得た説得だった。

ダムは完成した。

彼女はそれをきっかけに、その後の栄光と富を得た。しかし、そのことを一度もぼくに話したことはなかった。ダムに供養塔を建てることもなく、訪れたことすら殆どなかったのではないか。

半ば放心したような状態で、ぼくは母の日記を終わりから開いていった。
見覚えのある母の乱れた字が並んでいた。

さまあ見ろ

私は勝った

新しい人生が始まる 私は生まれ変わる

それにしてもうまくいった あの狼狽ろうばいぶり

大の大人があんなにも うろたえるとは 思い知ったか

前の頁を繰った。

絶対に許さない

私は絶対に、あいつを許さない

私に忌いまわしい烙印らくいんを押し

私を捨てた

今、私たちを守るダムの建設に反対している

いつも私の邪魔ばかり

あいつは鬼だ

こらしめてやる

確実な証拠をつかんだ

明日は赤のワンピース、膝丈短ひざたけめ

うろたえる様子が目に浮かぶ

覚えていなかったら？

思い出させてやる

これまで私が受けた数々の屈辱くつじよくを

権田挽ごんだびきも、縫流ぬいり敷敷さじきも、役には立つまい

あいつらは、能なし

私が、私の手で、私の復讐ふくしゅうを遂とげるのだ

明日、絶対に私は勝つ

前の頁も、その前の頁も、彼女の怨念で埋め尽くされていた。

洞田桃は、自分を捨てた両親を恨み続けていた。

川に流されたその子は、太腿の痣から、やはり「桃」と名づけられ、育てられた。育てられはしたが、いつも他所者扱いをされ、辛い思いをし続けたに違いない。自分を捨てた両親を恨むようになるのに時間はかからなかった。

長じてダム建設に関係するようになった彼女は、何かのきっかけで反対派の中心人物である蟹尾村の村長が、自分を捨てた実の父親であることを知った。そして、おそらく痣のことを覚えていたであろうことも。

権田挽を携え、縫流敷敷を従えて、彼女は村に乗り込んだ。そして、彼女の復讐を果たした。彼女はその功績で、巨万の富を築いた。

ウロタモモが、マシガニオで鬼退治か……。あべこべだな。

村の退去期限の前日、村長は遺体で発見された。遺書などは特になかった。村は水底に沈んだ。母はおそらく、自分の父親の死後、その日記を発見した。伝説のことを知った。父親の思いを知った。掟に背いて生かしてくれた実の親を、まるで言い伝えに従うかのように滅ぼしてしまっただことを知った。母は、父親の日記を自分の日記とともに、ひっそりと秘した。

その後の栄達は、彼女の心にどのように映っていたのだろう。

ぼくはその後、会社で特に昇進することもなく、去年定年を迎えた。妻も子もない。日記は今も、金庫の一番奥にしまわれている。

床奈ダムは今も満々と水を湛えている。

このお話は、私が、『桃太郎』の物語を読んで、

□ 鬼は、そんなに悪いことしてたっけ？

□ 鬼、意外と弱いな！

□ 桃太郎の子孫は、どうしたんだろう？

と感じたところから、何か真相があるに違いないと思い、

その理由を探るべく創作したものです。（暗くなりすぎてしまいました（笑））

本文を読んで、次の問いに答えよ。

一・ 洞田桃は、なぜ村を滅ぼそうとしたのか

二・ 村長の感じた「運命」とは、何か

三・ 真相を知った後の洞田桃は、その後の栄達を望んでいたか

無駄とはわかりつつ、運命に流されているとわかっているにもかかわらず、虚しさを感じている

洞田桃は、自分の人生を全うした。

自然は、さまざまな人間の営みを、泰然と受け止めている。

四・ 冒頭、筆者はなぜ、サワガニの話を混ぜたのか

五・ 桃に痣をつけたのはなぜか

六・ なぜ「ぼく」は、蔵が嫌いだったのか

七・ はじめ「ぼく」が母の日記を開く勇気を失ったのはなぜか

あなたなら、「桃太郎」をどのようにアレンジしますか